

## ディベートする二つの詩編（103編，145編）

— 父としての神か，王としての神か？ —<sup>1</sup>

ジョナサン・マゴネット

日原 広 志 (訳)

二つの詩編が，出エジプト記の特別な一節についての解釈ないし省察を，中心的な主題として持っているようです。その節は，聖書の著者たちや〔聖書詩歌の〕<sup>2</sup>作曲家<sup>3</sup>たちにとって非常に重要なテキストの一部であるため，多くの章句で様々な仕方で繰り返され聖書中に反響しています。両詩編は，その問題となっている節によく似た別バージョンを用いていますが，各々がそれを根本的に異なる仕方で理解しています。どちらも，神とイスラエルの民の〔間の〕，また他の人類と創造の間の関係の本質に取り組んでいます。各詩編でその同じ節を使用することは，単なる偶然の一致あるいは神の諸々の属性についての意義深い伝統的教えを巡る論敵同士のディベートの証拠なのでしょうか？ 両詩編の基礎を提供しているその節とは，出エジプト記34章6節であり，そして問題となっている詩編とは，詩編103編と145編のことです。

詩編145編は，伝統的なユダヤ教の典礼において傑出した位置を占めています。それは1日3回，朝の礼拝で2回，そして午後の礼拝の導入として1回朗読されます。詩編103編には，ユダヤ教「改革派 (progressive)」のサークル

---

1 訳注：これは2021年6月11日，Zoomオンライン会議方式で行われた西南学院大学  
学術研究所主催の公開講演である。原題は，“Psalms in Debate (103, 145): God as Father,  
God as King?”。

2 訳注：以下，本文中の〔 〕は訳者による補足を表す。

3 訳注：composer は「作者」「構成者」でもよいが，講演者の詩編の音楽的芸術性を重視する立場に基づき「作曲家」と訳出した。

内で、ハイ・ホリデイ<sup>4</sup>の各礼拝に使用される良く知られた楽曲があり、人生の儂さについての章句は、故人を記念する礼拝の中で重要な役割を演じています。

## 詩編145編

詩編145編は、私が聖書の詩を文学的観点から研究し始めた時に取り上げた最初のテキストの一つでした。このアプローチは、当時全盛の歴史的批評的また様式〔形態〕史的な諸方法とは非常に異なっていたため、私の方法論を定義する際に可能な限り正確であることが重要になりました<sup>5</sup>。それ以来、そのような文学的研究が主流になり、そのため私は気が付くと以前の著作を改訂したり、それを拡張したりしています。この詩編を教えている間、私は既にその8節が、いくつかの明らかな変更があるものの、出エジプト記34章6節の別ヴァージョンであることに気づいていました。あの出エジプト記の章句の中で、神はモーセの前を通り過ぎ、いかにして、神の憐れみと赦しが、その民による不正行為への応答になり得るのかを宣言します。しかし、これと並行して、特定の状況における憐れみの限界について警告がなされます。その本文の最初の部分は、ヘブライ語の原文において、神は以下の諸特質を持つと宣言しています。

エール ラフーム ヴェ・ハンヌーン エレフ アツパイム ヴェ・ラ  
ヴ-ヘセド ヴェ・エメト

[אל רחום וחנון ארך אפים ורב־חסד ואמת]

---

4 訳注：the High Holy の定義は様々だが、講演者は厳密にローシュ・ハツ・シャナー（新年祭）とヨーム・キップール（大贖罪日）だけを意図している。

5 Jonathan Magonet, 'Some Concentric Structures in Psalms', *The Heythrop Journal: A Quarterly Review of Philosophy and Theology*, Vol. 23, 4 October 1982, pp.365-376. この論文の別バージョンは Jonathan Magonet, *A Rabbi Reads the Psalms*, (SCM Press, London 1994, second enlarged edition 2004), pp.31-40 を参照。

「憐れみ深く、恵みに満ちた神。／怒るに遅く、忠実な愛とまことに富み」（出エジプト記34：6）<sup>6</sup>

これら個々の術語を翻訳するさまざまな方法があります。たとえあなた方がヘブライ語に馴染みがなくても、その最初の二つの単語 *ラフーム* *ヴェ・ハンヌーン* [רחום והנון] が同じような発声を共有しているのを聞きとれるでしょう。それらはまた、「そして／～と」を意味する接続詞「ワウ」[ו]によって一つに結びつけられています。この結合は、それらを効果的に一つの“ヘンダイアティス”[二詞一意] 一つまり二つの単語の結合が、個々の単語の意味を足し合わせたよりも大きな包括的な概念を創出すること一にしています<sup>7</sup>。*ラフーム* [רחום] は愛と憐れみの態度を表します。*ハンヌーン* [הנון] は、相手に「ただ与えること」それ自体を目的として与えつつ、寛大さと恵み深さを以て行為することを意味します。このように「ワウで結合されて」一緒になることで、それらは、何の見返りも期待しない神の境界線のない、普遍的で無制限の愛を表現しているのです。その文末にある二つ目の単語のペア、*ヘセド* *ヴェ・エメト* [חסד ואמת] もまた、互いに似た発声を共有し、そしてまた接続詞 *ワウ* [ו] で結合されています。これは、それらも“ヘンダイアティス”であることを示唆していますが、「ワウで結合されて」一緒になることで、それらは、非常に異なる種類の愛を表現しています。*ヘセド* [חסד] [協会共同訳「慈しみ」] という単語は、英語に正確に対応するものがないため、それは時々「慈しみ」または「慈悲」と翻訳されます。その意味は、契約を結んだパートナー間に存すべき忠実で永続的な愛と忠誠であるように思われます。この「契約」は、家族内で人々を一つに結び付けるもののように単純な場合もあれば、二つの国を結びつける政治的条約のように複雑な場合

6 訳注：以下、日本語聖書の引用は、特に断らないかぎり『聖書 聖書協会共同訳』からのものである。ただし協会共同訳が「慈しみ」と訳出しているヘブライ語ヘセドについては講演者の英文に従い「忠実な愛」としている。

7 この主題の包括的研究については Rosemary Lillas の博士論文 *Hendiadys in the Hebrew Bible: An Investigation of the Application of the Term* (University of Gothenburg, June 2012) ([gupea.ub.gu.se/bitstream/2077/29024/1/gupea\\_2077\\_29024\\_1.pdf](http://gupea.ub.gu.se/bitstream/2077/29024/1/gupea_2077_29024_1.pdf) (21.03.2021)) を参照。

もあります。肝心なことは、契約とはパートナー間の人格的、感情的な傾倒と忠誠であって、法的取決めであると共に、単なる法的要素を超えたものでもあるということです。前者は、ナオミの家族に対するルツの忠誠（ルツ記 3：10）によって説明されています。そして後者は、出エジプト記19章3-6節で定義されている諸条件で始まる神とイスラエルの間の契約によって例示されています<sup>8</sup>。2番目の単語「エメト」〔אמת〕は、何かがしっかりしていて信頼できることを意味するお馴染みの聖書の言葉「アーメン」に由来していて、この形では真実と信頼性の両方を意味します。この結合において、エメトは、契約関係の内部に存する諸義務、パートナー同士である神とイスラエルを互いに結びつけるところの愛、忠誠、忠実さ〔つまりヘセド〕を強化しています。同じ文中でのこの二つの対照的な愛のイメージ〔ラフーム&ハンヌーン、ヘセド&エメト〕の並置は、神の境界線のない無限の愛と<sup>いぼど</sup> 雖も制約と限界づけを回避できないような諸状況が存在するというを示唆しています。その契約は、人間の振る舞いに関する諸要求と義務が存在することを含意しており、したがって、もし民がそれらに進んで従おうとしないのであれば、制裁が適用できます。講演で後ほど出エジプト記のその章句〔34：6〕の続き〔34：7〕を検証する時に、どのような諸条件が適用されるかを改めて見てみましょう。

詩編145編と103編のいずれにおいても、出エジプト記34章6節の引用部分で最も注目に値するのは、出エジプト記の文末の語「エメト」（真実）が省略されていることです<sup>9</sup>。これは、両詩編がその〔本来あった〕制裁の厳しさを

---

8 中間的な位置にあるのはダビデとヨナタンの間の一連の契約であり、それらは彼らの互いに一致した気持ちの故に個人的なものであるだけでなく、ダビデが王になった際の公的な問題を取り上げている故に「政治的」でもある（サムエル記上 18：3, 20：14, 23：18）。

9 「エメト」の除去は、偵察隊の任務失敗に続いて起こった民の反逆の後で、モーセが神に憐れみを示してくれるよう求める場面で、この神的属性リストを初めて引き合いに出す際に既に生じていた（民数記 14：18）。それはあたかもモーセが、民を赦すよう神と交渉する時には、その法の厳格な文言に過度の強調を置きたくないかのようである。

和らげていることを示唆しており、これは詩編103編においてかなり推し進められることとなります。

出エジプト記の章句冒頭のフレーズ、ラフーム ヴェ・ハンヌーン に関しては、実のところ詩編145編8節では語順が逆転して以下のようになっています。

ハンヌーン ヴェ・ラフーム アドーナーイ エレフ アッパイム  
ウ・ゲドル・ハーセド

[חֲנוּן וְרַחוּם יְהוָה אֲרֵךְ אַפַּיִם וּגְדוֹל־חַסֵּד]

主は恵みに満ち、憐れみ深く／怒るに遅く、忠実な愛の大いなる方。<sup>10</sup>

[詩編145:8]<sup>11</sup>

なぜ、最初の2語の順序は、出エジプト記の「憐れみ深く、恵みに満ちた」から詩編145編の「恵みに満ち、憐れみ深く」へ、逆転しているのでしょうか？ その答えはおそらく、詩編145編は、各節の頭をヘブライ語アルファベット順になるよう子音文字を並べた折り句〔いろは歌〕形式として構築されているという実質的な理由にあります<sup>12</sup>。したがって、その詩編の8節は、ヘブライ語アルファベットの8番目の子音文字「ハート」[ח] で始まる必要があります。これは偶然にも「ハンヌーン」[חֲנוּן] という単語の頭文字でもあります。フレーズの意味に実質的に影響を与えずに済むこの順序の変更は、単にアルファベット詩の形態のこの位置〔第8節〕で使用できるようにするためかも知れません。

10 他の明白な小さな変化としては、単語ヘセドを支配する形容詞が、出エジプト記と詩編103編で使われている「豊富な、大量の」を意味する単語「ラヴ」[רב] から、「偉大な、大いなる」を意味する「ガードール」[גָּדוֹל] へと変えられている。これは意味上の変化をきたしてはいないようである。

11 訳注：講演者の英文に基づく。協会共同訳ではウ・ゲドル・ハーセドは「慈しみに富む方」となっており、ラヴとガードールを区別せず訳出している。

12 興味深いことに、ヘブライ語アレフベートは22文字であるが、この詩編は14番目の子音文字「メン」[מ] が省略されているために全21節しかない。いくつかの古代語訳とクムラン写本はその「メン」のための一節を提供しており、またラビ的伝承では説教的な説明を加えている。

この詩編〔145編〕を教え、読み返している内に、私は、詩編103編が、出エジプト記のかの節に似た別バージョンを含み、おそらく偶然に、その詩でも第8節という全く同じ位置にあることを思い出しました。詩編103編はアルファベット順に並べられていないので、冒頭のフレーズを逆転する必要はなく、そのヘブライ語本文は出エジプト記の語順に従っています。

ラフォーム ヴェ・ハンヌーン アドナーイ エレフ アッパイム  
ヴェ・ラヴ・ハーセド

[רחום וחונן יהוה ארך אפים ורב־חסד]

主は憐れみ深く、恵みに満ち／怒るに遅く、忠実な愛に富む。〔詩編103:8〕<sup>13</sup>

詩編145編の構造の概観を説明したいと思います。最初に、神を、ヘブライ語の単語「メレフ」〔מֶלֶךְ〕を使用して、「王」として紹介し、こうしてこの詩編の中心的な主題となるべきものは何かについての情報を聞き手に提供します。まさにこれは文字通りそう〔中心主題が中心的位置に〕なっています。なぜならその詩編の中央の3節、11-13節は、メレフから派生した名詞「マルフト」〔מַלְכוּת〕—「王国」、「王権」あるいは「支配」と様々に訳されている—を4回も含んでいるからです。詩編作者はその詩編のためにアルファベット詩の形態を意図的に選んでいるので、この強調とこの語を正確にこれら三つの中心的な節〔11-13〕に置くことも意図的であったと私は主張するつもりで

---

13 他の点において、詩編103編は、フレーズ「ヴェ・ラヴ・ハーセド」を保持している点で、また単語「ラヴ」（豊富な）を詩編145編のように「ガードール」（大いなる）に置き換えていない点で、出エジプト記〔34章〕により近い。しかし詩編145編同様、それ〔103編〕もまた出エジプト記オリジナル版の結語「エメト」（真実）を省略している。もし私たちがその2編が成立した歴史的順序を決定しようと試みるなら、103編は出エジプト記の言語により近く、そして詩編145編は、冒頭の単語〔ラフォームとハンヌーン〕の場所を入れ替えていることに加えて、上述のように「豊富な」から「大いなる」へ置き換えを行ってしまっている。しかし、そのような推測は、あり得る年代決定について求められるべき外証が何もない場合にのみ理論的であることができる。

す。それもまた文学的トリックの楽しみのために行われたのかもしれませんが。なぜなら、ヘブライ語のアルファベットにおいて、これらの節は「カフ」[כ], 「ラーメド」[ל], 「メム」[מ] の文字で順に始まり、これはかの単語「メレフ」[מֶלֶךְ], 王, の3文字を逆順に並べたものだからです。

- [11 כ] 彼らはあなたの王権に満ちる栄光を述べ／  
あなたの力強さについて語ります
- [12 ל] 人の子らに力強い御業と／  
王権の輝かしい栄光を知らせるために。
- [13 מ] あなたの王権はとこしえの王権／  
あなたの統治は代々に。

この構造的特徴を認識してきたので、詩編の構成の中で他のそのような要素を探すことは理に適っています。

- 1 賛美。ダビデの詩。／  
わが神, 王よ, あなたを崇め／  
代々とこしえに御名をたたえます。
- 2 日ごとにあなたをたたえ／  
代々とこしえに御名を賛美します。
- 3 主は大いなる方, 大いに賛美される方。  
その偉大さは計り知れない。

これらの3節で使用されている主題〔王としての神〕といくつかの特定の単語が、最終21節に再登場することは注目に値します。

- 21 私の口は主の賛美を語り／  
すべての肉なるものは／聖なる御名をたたえます。  
代々とこしえに

聖書の詩的構造を分析するための一つのアプローチは、何らかの理念や構成要素を定義するのに役立つキーワードの反復を探すことです。ヘブライ語の本文では、たとえヘブライ語に精通していない場合でも、そのような諸単語を目立つように色分けを使って強調することは有益だと思います。

〔PowerPoint を画面表示しつつ〕1-3節には、〔蛍光ペンの〕青色で〔示された〕動詞「バルーフ」(たたえる)〔ברך〕(2回)があり、それは21節にも再び現れます。同様に赤で、神の名を指す単語「シェーム」(名前)〔שם〕は1, 2および21節にあります。同じく黄色で、動詞「ハーラル」(賛美する)〔הלל〕およびその派生名詞「テフィッター」〔תהלה〕(賛美)は、最初の3節すべてに現れ、21節にも更にもう一度現れます。最後に、「レ・オーラーム ヴァー・エド」〔代々とこしえに〕〔לעולם ועד〕というフレーズ〔緑色〕は、1, 2節そしてまた21節にあります。効果的に1-3節と21節は、その詩の周りに“インクルージオ”〔囲い込み〕を形成しています。冒頭の部分で強調されているのは、詩編作者である「私」が神にもたらす賛美であり、最後の部分では、「私の口」が神をたたえて賛美するだけでなく、すべての肉なるものが同様に神の名をたたえることとなります。そういうわけで、その詩編には明確に規定された始まりと終わりがあり、その冒頭の節と中央の3節には、人類に対する神的支配に対する神への賛美という主題があります。これは、4節から神の王国についての中央のセクション(11節から13節)〔の前節〕までと、14節から20節までの、融和に説明を要する二つのセクションに分離をさせます。さて、それら〔4-10節と14-20節〕の中に何らかのパターンを見出し得るでしょうか？

聖書章句に対するこの文学的なアプローチで、私たちはいくつかの前提を立てています。第一に、何らかの明らかな不規則性やその意味を理解することの困難さは別として、その手許にある本文の完全性を信頼できるということ。第二に、ある文学的テキストの性質について—おそらく詩の場合などは特に—私たちの同時代的な仮定が、その上に人工的な構造を押し付けさせようとするのを回避するよう努めること。これはまた、可能な限り、聖書世界内で利用可能な文学的諸慣習に対して鋭敏になるべきことを意味します。第



三に、そのテキスト内の諸要素または特徴の間に、論理的関連性が存在する場所を認識することに対して、そしてそれらの妥当性についての自らの判断を信頼することに対して、開かれていること。そして最後に、その分析のすべての段階で私たちの諸仮定に異議を唱える準備ができています。

これらを念頭に置いて、4節から10節を見てみましょう。

- 4 代々、人はあなたの業をほめたたえ／  
あなたの<sup>14</sup>力強い御業を告げ知らせます。
- 5 私はあなたの威厳ある栄光の輝きと／  
あなたの奇しき業の数々を思い巡らします。
- 6 人々はあなたの恐るべき力を述べ／  
私はあなたの偉大な御業を物語る。
- 7 彼らはあなたの豊かな恵みの思い出を語り／  
あなたの義を喜び歌います。
- 8 主は恵みに満ち、憐れみ深く／  
怒るに遅く、忠実な愛の大いなる<sup>15</sup>方。
- 9 主はすべてのものに恵み深く／  
その憐れみは造られたものすべての上に及ぶ。
- 10 主よ、あなたが造られたものはすべて、あなたに感謝し／  
あなたに忠実な人たちはあなたをたたえる。

これらの節を繰り返し読む都度私の心を打ったのは、8節と9節を、それらを取り巻く節から区別して際立たせている何かです。つまり、4-7節と10節は、二人称で神に直接呼びかけられています。それらは、神の業、力強い御業、輝き、畏怖の念を起こさせるものと偉大さ、豊かな恵みと義に対して、代々の人々がささげる賛美を表現し、神の敬虔な信者たちによって与えられ

14 訳注：以下、4節後半、5節後半、6節前半と後半の「あなたの」、および10節前半の「あなたが」は講演者の英文による。

15 訳注：前注10参照。

た彼らの諸々の感謝と祝福で終わります。この二人称の賛美のリストは、8節の起源と想定される出エジプト記34章6節に忠実に、神的諸属性について三人称での声明を提供している8節と9節によって中断されています。9節において、すべてのものへの神の豊かな恵みと、神が造られたものすべてのための憐れみ（ラハミーム）を加えることによって、ラハミーム「憐れみ」（9節）とヘセド「忠実な愛」（8節）の両方が共に含まれました。このセクションの節〔4-10節〕は、8-9節の前にそれらのうちの四つ〔4, 5, 6, 7節〕,〔8-9節の〕後に一つ〔10節〕と非対称に配置されています。私たちは14-20節を検証した後、再びこのセクション〔4-10節〕に含意されているものに戻って考えることとなります。

- 14 主は、倒れそうな人を皆支え／  
うずくまる人を皆立ち上がらせる。
- 15 すべてのものがあなたに目を向けて待ち望むと／  
あなたは時に応じて食べ物をごさる。
- 16 あなたは手を開き／  
命あるものすべての望みを満ち足らせる。
- 17 主は、その歩まれるすべての道で正しく／  
あらゆる御業において慈しみ深い。
- 18 主は、ご自分を呼ぶ人皆に／  
まことをもって呼ぶすべての人に近くおられます。
- 19 主を畏れる人たちの望みをかなえ／  
彼らの叫びを聞いて救ってくださいます。
- 20 主は、ご自分を愛する者を皆守り／  
悪しき者はことごとく滅ぼします。

神の「王権」についての中心節〔11-13節〕の後に続くこのセクションの節〔14-20節〕も、4-10節と同様の基準で〔中央の神属性17節によって前後に〕分割することができます。それらを分けるのに役立つのは、14-16節と18-20

節が、概して他者たち — おそらく人間や被造物たち — の諸々の望みのための、そして〔望み〕に応じた、神の諸行動について語っているということです。しかし乍ら〔概してとは言ったものの〕、2番目のセクションである18-20節には〔14-16節と〕違いがあり、そこでは神の恵みの受領者は、以下で私たちが論じるところの、より限定的なカテゴリーに属しています。しかし乍ら〔それらを前後に分離している〕17節には、8-9節の神の諸属性についての三人称のリストと並行して、同様に独自の三人称の諸属性のセットがあり、今度は最初に神の「義」を、そして最後にもう一度神の「ヘセド」の特質を、強調しています。前のセクション〔4-10節〕の非対称性〔四つ対一つ〕とは異なり、こちらは対称的であり、中央節の両側に各々三つの節が配置されています。

この詩編に現れるパターンは、全体として、簡略化された形で示すことができます。

1-3	私は王なる神をたたえる。	
4-7	人間が神に「与える」	
8-9	神の属性：憐れみ	
10	人間が神に「与える」	
11-13		王なる神
14-16	神が人間に与える	
17	神の属性：義	
18-20	神が人間に与える	
21	すべてのものが神をたたえる	

4-10節の最初の文学単位では、人間が神に感謝と賛美を「与え」ます。14-20節の2番目の文学単位では、鏡に映したイメージのように、神が人間に与えます。二つのセクション〔4-10と14-20〕はそれぞれ、神の永遠の属性 — 前者〔4-10節〕では、境界線のない愛と憐れみ深さ〔8-9節〕、後者〔14-20節〕では義と忠実な愛〔17節〕 — を描写する節によって中断されています。

「義」という言葉を用いたこの第二の属性が、その詩編に〔出34章6-7節とは〕異なる要素を導入します。14-16節は、必要な時にはすべての人間と被造物たちに適用されるようです。しかし乍ら〔14-16の普遍性とは異なり〕、18-20節は、「ご自分を呼ぶ人」で以て始まり、神と彼らの関係の親密さによって定義される特定のカテゴリーの人々を差異化しています<sup>16</sup>。「主を畏れる人たち」<sup>17</sup>（「彼を恐れる人たち」と訳されることもあります）は、特定の神殿詩編に登場するカテゴリーです<sup>18</sup>。3番目のカテゴリーである「ご自分を愛する」者を伴う〔20〕節は、ショッキングな対照で締めくくられています。神はご自分を愛する者を守りますが、悪しき者を滅ぼします。私たちが突然思い出させられるのは、神は、地上の王のように、己が臣民に対して生殺与奪の権を握っており、公正と正義が問題となるところでは、神的憐れみには限界があるということです。これはおそらく、契約関係の下で自らの責任を果たさない人々に対する罰についての言及を伴っていた、出エジプト記の元来の章句から〔詩編が〕欠落させた部分〔出34：7b〕を意図的に思い出させるものです。

これら二つのセクションは、それぞれ神との関係性と一連の神的諸属性を述べ、神の王権を宣言する詩編の中央部の節によって文字通り戴冠されています。おそらくその全体は、善良な神によって支配された世界に存すべき理想的で調和のとれた環境の描写として意図されています。アルファベットを

---

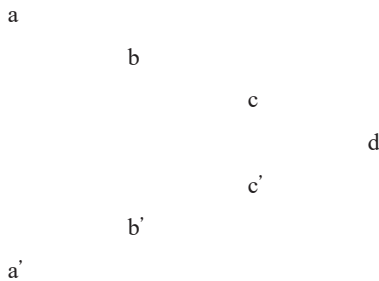
16 そのヘブライ語は「カーローヴ アドナーナイ レ・ホル・コーレアヴ」〔קרוּב יהוה לנל־קרואו〕と読める。それは、「神はコーレアヴ（ご自分を呼ぶ人）皆にカーローヴ（近くおられます）」という言葉遊びを含んでいる。

17 動詞「ヤーレー」は二重の意味を持っている。怖がる意味での「恐れる」と、神の他者性と直面した時の「畏怖する」である。この後者の意味を翻訳で伝えることは困難である。

18 例えば、詩編 118 編 4 節と 115 編 11 節。これら詩編の両方において、彼らはイスラエルの民で以て始まり、祭司が後に続く、一連の流れの第三番手としてリストアップされており、彼らが、神との特別な、恐らくはより深い関係性へと入っているイスラエル人または非イスラエル人からなる、主の礼拝者たちの集団を表わしている可能性があることが暗示されている。〔「さあ、イスラエルは言え。慈しみはとこしえに。さあ、アロンの家は言うがよい。慈しみはとこしえに。さあ、主を畏れる人々は言い放て。慈しみはとこしえに。〕（詩編 118：2-4）他を参照。〕

〔形式を〕統制する外枠として用いている，その詩編の構造の形式〔キアスムス〕には，ある厳格な取引〔人間が神に「与え」，神は人間に与える相互作用〕の論理が存在しています。詩編作者は，たとえ力の不均衡が明らかであるにしても，パートナー二者間の相互責任を伴う契約合意の諸要件を真剣にとらえています。その諸々の利点，制限，および条件は十分に明確にされる必要があります<sup>19</sup>。神はイスラエルの至高の王なのです！

「キアスムス〔交差配列構造〕」とか「集中構造」など様々に呼ばれる上記のパターンは，散文，詩，預言的言明のいずれにおいてもヘブライ語聖書の中に頻繁に登場します。これは，以下のように図式化して示すことができます。



aとa'，bとb'などは，個々の単語，文，またはさらに大きな単元の対応する文学単位同士を表しています。それらは，異なって表現された並列する理念同士として，あるいは論争中の正反対の要素同士としてなど，様々な仕方で対応することがあります。その一致は不完全である可能性があり，実際は何も存在しないところに関係性や作為的なシンメトリーを創出しようとする誘惑は常に存在します。私たちはその構造がより捉えどころのない詩編103編を検討した後，このパターンを再考することになります。

19 善良な王としてのこの神のモデルには，いかにして地上の君主は，自分の臣下たちの必要と喝采に応えて自らの諸行動を導くべきなのかについての模範を提示することもまた意図されていると示唆することも，決してこじつけに過ぎるということはないであろう。

## 詩編103編

〔上述の通り〕詩編145編は意識的に神を名宛人として呼びかけており、そのレトリックは世間の注意をひくよう意図されています。それ〔145編〕は「わが神、王よ、あなたを崇め」で以て始まり、その詩編全体を通してこれ〔王としての神〕を正確に推し進め、すべての被造物は代々としえに神をたたえたと結論します。一方、詩編103編の著者は、彼自身だけを名宛人として呼びかけられた私的な独白らしきもので以て始めます。

- 1     ダビデの詩。／  
      私の魂よ、主をたたえよ。／  
      私の内なるすべてのものよ／その聖なる名をたたえよ。
- 2     私の魂よ、主をたたえよ。／  
      そのすべての計らいを忘れるな。

「魂」と訳されている単語「ネフェシュ」は、「生命力」のようなものを意味し、生けるものを死せるものから区別します。それはまた、「自身」、つまり彼／彼女自身その人を意味することもできます。詩編145編の著者が、まさに最初から意識的に世界を扱っていたのに対して、詩編103編の著者は、自らの人生における、そして究極的にはこの世界における神の役割について、彼自身の個人的な黙想を盗み聞きするように他者を招いています。これもまた他者の注意を捉えるための修辭的的技巧ですが、神の影響力を個人レベルに捉えることで、詩編作者の経験と理解を共有するよう他者に促すことを目的としています。詩編145編と同様、それ〔103編〕は“インクルージョ”〔囲い込み〕の中に含まれています。〔つまり〕そのオープニングは「神をたたえよ」という彼自身への訴えです。〔一方〕その詩編の最後で、神をたたえよという同じ訴えが、ちょうどそれ〔103編〕が詩編作者彼自身で以て始まった〔1節〕のと全く同じように〔「私の魂よ、主をたたえよ」(22節後半)で〕終わる直前〔20-22節前半〕で、神に創造されたすべてのものへと、天にあるものにも地にあるものにも同様に、呼びかけられています。

### 出エジプト記34章6-7節についての補説

詩編103編が、出エジプト記の章句の解釈において、詩編145編とはいかに根本的に異なっているかを理解するために、私たちは出エジプト記34章6-7節においてモーセへ与えられた神の属性についての描写の残り〔冒頭で扱っていない7節〕のことを思い出さなければなりません。

ここまで指摘してきたのは、神の愛の二つの対照的な側面が出エジプト記34章6節で表現されており、その一つは境界線のない無制限なものであり、もう一つは神とイスラエルの契約の枠組の中で制約されたものであるということでした。その章句はある主要な神学的難問に簡潔かつ率直な表現で答えます。全世界とその中の一切、つまり天と万象の創造主なる神はいかにして特定の民、ましてやその中の個々人の生に人格的に関わることができるのか？ ここで提示された答えは、神は故意にイスラエルの民との契約の中へと入ることによってご自身を制限し、そしてそれによって間接的に、人類全体と〔の契約へ入る〕ということです。これが機能するためには、満たされなければならない諸条件があります。それはイスラエルの民に、同胞相互の、他のものたちへの、そして神に対する自らの振る舞いを通して、この途方もない契約が維持されるように、自分たちの役割を進んで果たす用意があるかに完全にかかっているでしょう。これらの諸条件は6節を締めくくるあの特殊言語「ヴェ・ラヴ・ヘセド ヴェ・エメト」「忠実な愛とまことに富み」によって導入されて、契約の諸条件は後続の7節で詳細に説明されます。

ノーツェール ヘセド ラー・アラフィーム ノーセー アーヴォー  
ン ヴァー・フェジャア ヴェ・ハッターアー ヴェ・ナツケー ロー  
イエナツケ ポーケード アヴォーン アーヴォート アルパーニーム  
ヴェ・アルベネー ヴァーニーム アルシッレーシーム ヴェ・アル  
リッペーイーム

〔 נצר חסד לאלפים נשא עון ופשע וחטאה ונקמה לא ינקם פקד עון אבות על־בנים ועל־בני בנים על־〕

שלשים ועל־רבעים

幾千代にわたって忠実な愛を守り／過ちと背きと罪とを赦す方。／しかし、罰せずにおくことは決してなく／父の罪を子や孫に／さらに、三代、四代までも問う方。

その諸条件は、神のヘセド（契約の愛）は幾千代にわたるという約束で以て始まります。いかにしてこの愛は表現されるべきでしょうか？ 神は、様々な種類の不正行為を文字通り「担ぎ上げる」つまり除去し、赦す一つもりです。それらは三つの個別条件でリスト化されていますが、一緒に〔列挙〕されることで、人間が犯すかもしれない不正の総体を指示しています。最初の「アヴォーン」〔協会共同訳「過ち」〕は、通常「不義」と訳され、習慣的な不正行為を指示しているように見えます。第二の「ペシャア」は、背きの罪を意味し、禁じられていることを十分認識しつつ故意になされる何かです。第三の「ハッターアー」は伝統的に「罪」と訳されていますが、この三つの術語の中で最も弱いものです。文字通りにはそれは的外すことを意味し、期待される行動基準に比べ損なうことです。しかしながら、その次のフレーズが、神の赦そうとする積極的意志に断固たる制限を設けています。そのヘブライ語の構文は以下の通りです。「ヴェ・ナツケー ロー イェナツケ」文字通りには「しかし罪なき者とする事、彼は罪なき者としたままではおかないだろう」と読めます。この意味については様々な解釈の余地がありますが、私が主張したいのは、神は「真実」〔エメト〕を属性として持っているので、加害者が自らのしたことを認め、必要な悔い改めと賠償の行動をとるつもりがない限り、神は上記のいかなる不正行為も赦すことができない、ということです。そうした条件と要求なしには、世界には何の正義もあり得ないのです。

この条件の重大性を強調するために、神は「父のアヴォーン（不義）を子や孫に／さらに、三代、四代まで問う」〔方である〕という不穏なフレーズが続きます。このフレーズを理解するために、ここで名宛人として呼びかけられている人物は、家長たるイスラエルの成人男性であることを憶えておくことが重要です。彼の法的なアイデンティティには、彼の「所有」である妻、



子ども、孫、奴隷、土地、家畜までを含んでいます。生涯のうちに、彼は子供たちや孫たちのみならず四代目のひ孫たちまでも見ることができるのです。ですからこの警告は将来についてのものではありません。むしろそれが意味しているのは、彼の不正行為は彼の全人格の上に重大な影響を及ぼすものであり、それ〔人格〕には法的に彼に属しているか彼から出たものすべて、つまりこの瞬間に生きているものすべてが含まれるということです。彼はそれらすべてに対する究極的責任と注意義務を負っているのです<sup>20</sup>。家族の一員側から観たこの不公平さは、子は親の間違った行動に関して責任を問われるべきではないと主張する預言者たちによって取り上げられています（エレミヤ書31：29、エゼキエル書18：2, 30）。それゆえ、この出エジプト記〔34：6-7〕の部分〔引用〕または全文引用がヘブライ語聖書中に数多くあるにも関わらず、民数記14章18節の唯一の例外を除いて、この最後のセクション〔父の罪を子や孫に／さらに、三代、四代までも問う方〕は省略されているというのは意義深いことです<sup>21</sup>。今や私たちは、いかに詩編103編がさらに先へ行っており、神の憐れみの上に設定されているこの限界に異議申し立てをしているかを見ていくことになります。

20 この別バージョンは十戒の他の神々に仕えることを禁ずる戒め（出エジプト記 20：5、申命記 5：9）の中にも見出される。そこではそれは最後に「私を憎む者には」を付加することによって限定されている。

21 詩編 86 編 15 節、103 編 8 節、145 章 8 節、ヨエル書 2 章 13-14 節、ヨナ書 4 章 2 節、ナホム書 1 章 3 節。また詩編 116 編 5 節も参照せよ。〔詩編 116 編は〕その同じ調子〔詩人を死や他の困難から救う神への感謝、いくつかの語彙〔「私の魂」〕（103：1, 116：7）、「計らい／報いる (למנוח)」（103：2, 116：7）、「魂を～から」（103：4, 116：8）、「慈しみ／慈しみに生きる人／忠実な者たち」（103：4, 8, 11, 17, 116：15）、「憐れみ」（103：4, 8, 13, 13, 116：5）、「正義／正しき方」（103：6, 116：5）、「恵み」（103：8, 116：5）〕、そして以下のような通常とは異なる文法的形態を〔103 編と〕共有している。すなわち 103 編 3-5 節と 116 編 7 節を比較参照せよ。〔詩編 103 編 3-5 と 116 編 7 節が「私の魂」を名詞ネフェシュの性（女性名詞）に合わせて「あなた（女性）の」で受けて表現する際、二人称女性単数の人称接尾辞として通常のヘブライ語接尾辞「エーフ」〔ַי〕ではなく、どちらもアラム語的な接尾辞「エーヒー」〔ִי〕を用いている詩編であることを指す〕

## 詩編103編 (続)

詩編103編は詩編145編ほど形式的に構成されてはいません。それはより流動的であり、諸々の理念が互いへと流れ込んでいます。それにアプローチするための一つの方法は、出エジプト記で私たちにすっかり馴染みあるものになったキー・ワードで、この詩編全体に亘って繰り返されているものを識別することです。ちょっとそれらをリストアップしてみましょう。神の境界線の無い愛と憐れみを意味する「ラフーム」は4, 8節に、また13節中には二度登場します。契約に対する忠実な愛と忠誠を意味する「ヘセド」もまた4, 8節に、そして〔人称接尾辞や名詞独立形を伴う〕連語形で11, 17節に登場します。これら二つの鍵となる理念が4回ずつ登場していることは、両者の均衡を維持するためなので、おそらく重要なことです。等しく重要性を持っているのは、出エジプト記34章7節に従って、神が赦すべき「不正行為」を表す三つの単語—「アーヴォーン」(3, 10節), 「ハッターアー」(10節)そして「ベジャア」(12節)—が登場していることです。詩編145編で馴染みのもう一つのフレーズは「神を畏れる者」で、〔彼らは本詩では〕「ヘセド」(11, 17節)と「ラフーム」(13節)両方の神の愛の受益者となるべき者たちです<sup>22</sup>。

注記する価値のあるもう一つの単語は、「知る」を意味する動詞「ヤーダア」です。7節は〔8節で引用される〕あの出エジプト記の章句をこのように導入します。「彼(神)は、ご自分の道をモーセに／御業をイスラエルの子らに**知らせた**。」これは私たちにモーセからの神への、どのように神の目に適うかを自分が**知る**ことができるように神の道を自分に示して(彼に**知らせる**)下さいとの嘆願—出エジプト記33章12-13節—を〔出エジプト記34章より更に〕遡って参照させます。このことは、詩編作者は故意に、モーセと神の接

---

22 明白な重要性ではやや劣るものの、その詩編中には何と9回も「すべて」を意味するヘブライ語の名詞「コール」の繰り返された用例が存在する。それは詩編作家のために神が為してきたところの大いなるわざ「すべて」の上にも(3-5節)、また神の支配下にある天と地にあるすべてのものの上にも(19, 21, 22節)、大いなる強調を置いている。

触というこの重要な出来事〔出エジプト記34章5-9（特に6-7）節〕と、それに先行し、それへと導いた彼らの間の会話〔同33章12-23（特に12-13）節〕を扱っているということを鮮明にします<sup>23</sup>。その動詞は、詩編作者が私たちに、神は人間の脆さと儂さを**知っている**ということを感じ動的に思い出させる14節に再び登場することになります。

自分「自身」〔「私のネフェシユ」〕を名宛人〔あなた〕として呼びかけながら、詩編作者は神が彼の命を支えてきたあらゆる方法を認識します。

- 3 主はあなたの過ちをすべて赦し／  
あなたの病をすべて癒やす方。
- 4 あなたの命を墓から贖い／  
あなたに忠実な愛と憐れみの冠をかぶせる方。
- 5 あなたの望みを良きもので満たす方。／  
こうして、あなたの若さが／鷺のように新しくよみがえる。

神は詩編作者の「不義」すべてを赦すことから始め、こうして出エジプト記のあの章句における約束〔過ちと背きと罪とを赦す〕を早くも成就しています。4節は、神があなたに「ヘセド ヴェ・ラハミーム」— 神的属性の「忠実な愛」と「境界線のない愛」— の冠をかぶせる〔と語り〕、私たちのキー・ワードの中の二つで以て締めくくられています。以前は出エジプト記34章6節で〔ラフーム&ハンヌーンとヘセド&エメトの二組に〕分離されていましたが、ここではそれら〔ラハミームとヘセド〕は神的憐れみの単一の概念の中へと融合されています。ここでは「冠をかぶせる」という動詞の使用が、詩編作者の経験を、神との特別で価高き関係の中に生きている者として高めているのです。

---

23 さらに詳細な背景については、ジョナサン・マゴネット（日原広志訳）「神との交渉術 — モーセと共に学ぶ特別上級セミナー —」『西南学院大学神学論集』77巻1号（2020年3月）、63-83頁を参照。

- 6 主は虐げられているすべての者のために／  
正義と公正を行う。
- 7 主は、ご自分の道をモーセに／  
御業をイスラエルの子らに知らせた。

6節は神の義で以て始まるさらなる一連の神的属性を持ち込みます。このことは神の裁きは虐げられているすべての者を支えるという事実によって例証されます。私たちは今ははっきりと出エジプト記〔34：6-7〕からのあの引用〔詩編103：8〕を築き上げつつあります。そして7節は、いかにして神はモーセに、そして彼を通して民に、神の道について知らせたかを回顧することによってそれ〔次節〕を導入します。

- 8 ラフォーム ヴェ・ハンヌーン アドナーイ エレフ アッパイム  
ヴェ・ラヴハーセド

[רחום וחנן יהוה ארך אפים ורב־חסד]

主は憐れみ深く、恵みに満ち／怒るに遅く、忠実な愛に富む。

しかし乍ら、その先に続くものは、契約の諸条件を破ることに関する制裁と潜在的な罰についての警告を伴っていた出エジプト記のオリジナルの定式に対する驚くべき異議申し立てであるように思えます。単語「ロー」（否、～ない）を四度強調した反復は、単一のドラム・ビートのように、それぞれが「大音量」でそのメッセージを印象づけます。

- 9 **ロ**ーラー・ネツァル ヤーリーヴ  
ヴェ・**ロ**ー レ・オーラーム イットール
- 10 **ロ**ー ハ・ハターエヌー アーサー ラーヌー  
ヴェ・**ロ**ー ハ・アヴォーノーテヌー ガーマル アーレーヌー

[לא־לנצח יריב]

[ולא לעולם יטור]

[לא כחטאינו עשה לנו]

[ולא כעונותינו גמל עלינו]

- 9 永遠に争い続けること *なく* /  
 とこしえに怒り続けることも *ない*。
- 10 私たちを罪に応じてあしらうこと *なく* /  
 過ちに従って報いることも *ない*。

この否定辞ルートをたどっているのが、そのレトリックは、神のヘセド — 彼（神）を畏れる者たちに対する神の忠実な愛 — を、まさに天の中に置くというメタファーで以て飛翔します。その後につけ足されるのは、諸々の罪のうち最も深刻なものさえも進んで赦す神の意欲は、地上で想像できる最大距離ほどの広さと幅を持っているということです。

- 11 天が地よりも高いように /  
 主のヘセド（忠実な愛）は主を畏れる者をはるかにしのぐ。
- 12 東が西から遠いように /  
 主は私たちの背きの罪を遠ざける。

12節で以て、詩編作者は神に、出エジプト記においてリスト化された不正行為の第三のそして最も重大なペシャア（背きの罪）を除去させました。その他の二つ〔罪と過ち〕もまた10節において赦されてしまっています。詩編作者は、神がかつてモーセに語ったところをはるかに超えた包括的な恩赦を、神に代わって宣言するのです。

少なくとも二つの問いがこの〔出エジプト記版への挑戦的〕応答に対して提起されます。神の慈しみについてのそれほど力強い断言へと導いた特定の諸状況とは何だった可能性があるのでしょうか？ そしてそれを説明するために神のどのような側面が呼び出されたのでしょうか？ 後者については次節で直接回答されます。

- 13 ケ・ラヘーム アーヴ アルバーニーム  
 リハム アドナーイ アル・イエレーアーヴ

[כרחם אב עלי־בנים]

[רחם יהוה עלי־יראיו]

- 13 父が子らに憐れみをもたらすように／  
主を畏れる者らに憐れみをもたらす。

この節において、憐れみを示すための動詞は、神の境界線を持たない無制限の愛を表現するために8節で選ばれた単語として今や私たちにはお馴染みの、ラーハム〔אָהב〕です。今や神が民のために持つ関係性として導入されているのは、父が子どものために感じるあの圧倒的な愛と憐れみです。イスラエルの振る舞いは、契約の諸条件によって期待される真実な愛と忠誠である、ヘセドの厳格な諸要求に違反した可能性があります。しかしそこにいつでも見出される境界線を持たない神の愛ラフームに訴えることはそれでもなお可能です。厳格な法律の条文の下では赦され得ないことが、にもかかわらず、慈しみ深い父によって赦される可能性は常にあります<sup>24</sup>。

このイメージ〔父としての神〕を開いてしまっているのです、詩編作者はそこに含意されているものを探求していきます。モーセに自らの諸特質を**知らせた**神は、人間がどのように造られているかという本質、私たちの儂さ、そして私たちの究極の運命、についてもまた**知**っています。

- 14 主は私たちが造られた様を知り／  
私たちが塵にすぎないことを覚えておられる。  
15 人の日々は草のよう。／  
野の花のように咲くのみ。

---

24 イスラエルに対する父としての神のイメージは申命記 32 章 6 節、イザヤ書 1 章 3 節、63 章 16 節、64 章 7 節、エレミヤ書 3 章 19 節、31 章 9 節、マラキ書 1 章 6 節、箴言 3 章 12 節に見出され得る。その最初期のヴァージョンは既に出エジプト記のモーセがファラオに告げるべきことについての神の教示の中に見出されるべきだろう。すなわち、「主はこう言われる。イスラエルは私の息子、私の長子である」（出エジプト記 4: 22-23）とある。その同じ「家族関係」が反響しているのは出エジプト記 6 章 6 節においてであり、〔そこで〕神がイスラエルを奴隷状態から「贖い出す」ことを約束する時、神は、負債のために奴隷に売られた一人のイスラエル人を解放するべき、その家族の一員としてのあの責任〔ゾーエール〕を前提としている。この理念はイザヤ書 63 章 16 節「あなたは私たちの父です。……主よ、あなたは私たちの父、私たちの贖い主です」において反響が見られる。神による己が子（北王国）への感情を顕わにした関与についてはエレミヤ書 31 章 20 節において表現されている。

- 16 風がそこを吹き抜ければ，消えうせ／  
 生えていた場所も，もはやそれを知らない。

この人間の脆さと私たちの個々の命の短さの喚起は，詩編作者にとって，これを，私たちの存続にとって非常に不可欠な神の忠実な愛〔ヘセド〕と対照する機会になります。彼は出エジプト記34章7節の他の二つの側面〔「幾千代にわたって慈しみを守り」と「父の罪を子や孫に…」〕を取り上げます。神のヘセドは時代を超え，存在し，幾千代にわたって利用可能です。第二に，詩編作者は，神が家長の不正行為をその家族に負わせるというあの思想に間接的に異議を唱えます。神はこれらの世代を義で以て遇するでしょう。神の義へのこの特別な言及は，前もって6節でそれ〔ツェダーカー〕が神の諸行動を支配する一般原則として登場していたことへと，私たちを結び付けます。

- 17 しかし，主のヘセド（忠実な愛）は／  
 いにしえからとこしえまで主を畏れる者の上にとあり／  
 その義は子らの子に
- 18 その契約を守る者に／  
 その諭しを心に留めて行う者に及ぶ。

私は先ほど，何が出エジプト記の本文のそのような根本的な改訂へと導いた可能性があるかと尋ねました。一つの提案は，その詩編がバビロンからの捕囚民の帰還後に作られたというものです。つまり，それは神が誠実にご自身の民を彼らの故郷へと〔帰還させ〕回復させたことに対する喜びと賛美の歌です。しかし，私がおの中に発見したのは，より大きな切迫感と，捕囚や他の何らかの苦難の経験は契約が破棄され，神が彼らを見捨てた何よりの証拠であると確信している人々の考えに反論する必要があります。代わりに，詩編作者は，出エジプト記の伝統的な教え〔34：6-7〕についての彼の解釈から，諸々の〔神に見捨てられたとしか思えない〕様相にもかかわらず，神の忠実な忠誠心と境界線のない愛がついには回復へと導くという，神のヘセドとラ

ハミームの只中に彼らの信仰を堅持すべきであると主張するのです。

詩編作者は、神のヘセド（忠実な愛）の宇宙的次元を呼び起こしましたが、それを、親の持つ親密さ、神が弱い人間のために覚えるところのかのラハミーム（憐れみ）と並置しました。その詩編は、出エジプト記のオリジナルの節に並存している愛についてのこれら二つの次元〔無制限な（ハンヌーン &）ラフームと限定的なヘセド（&エメト）〕のパラドックスについて創造的な再解釈されたイメージを提供してきました。詩編作者に残されているのは、神の僕たち一天的な〔僕〕から地につながれた〔僕〕に、〔ついには〕詩編作者自身に至るまで、こぞって神に対する彼らの祝福の歌をささげているところの一の多様な層をリストアップすることです。おそらく、ここでも、簡潔とはいえ、神の御座と神の王権（マルフーム）への言及があることは驚くべきことではありません。しかし、詩編145編で非常に突出していたその主題は、ここでは単に言及されるのみです。

- 19 主は天に王座を据え／  
その王権はすべてを治める。
- 20 御使いたちよ／  
御言葉を行う力ある勇士たちよ、主をたたえよ／  
御言葉の声に聞き従うために。
- 21 主の万軍よ／  
主に仕え、御旨を行う者たちよ、主をたたえよ。
- 22 主の造られたすべてのものよ、主をたたえよ／  
主の治めるすべての場所で。／  
私の魂よ、主をたたえよ。

若干の留保付きとは言え、詩編103編へも集中構造のパターンを適用してみることが可能です。



a	1-2	祝福
b	3-5	神の個人との関わり
c	6	神の義
d	7-10	神の憐れみ
e	11-14	父の持つ憐れみ
d'	15-16	人間の弱さ
c'	17-18	神の義
b'	19	神のすべてのものとの関わり
a'	20-22	祝福

- ・ 1-2節と20-22節は明瞭に動詞「バーラフ」(祝福する)の使用に基づいた“インクルージオ”〔囲い込み〕として機能しています。
- ・ 3-5節と19節は神の個人との関わりを、bにおいてはきわめて個人的レベルで、b'においては一般的原則として、表現しています。
- ・ 6節と17-18節は神の「義」、つまり虐げられているすべての者のための公正〔ミシユパート〕を希求しながら、幾世代にもわたるツェデクの理念を導入しています。
- ・ 7-10節と15-16節は 整合性が取れているようには見えないので、私たちはそれらを別々に検証することになります。

前述したように、私たちは、ある聖書の章句のさまざまな節や単元を、結論先にありきで対応部分を持つ構造〔キアスムス〕の中へと無理やり押し込もうと試みることに慎重であるべきです。上記のパターンにおいては、dとd'と記されたセクションは、キーワードの反復を通して、主題の直接的同等性によっても、同類であるようには見えません。7-10節において起こっていることは、出エジプト記のオリジナルの章句への驚くべき異議申し立てです。それは、神の永遠性と人間の人生の儚さを対照させることによって始まり、イスラエルに対する神の怒りは永遠に続くわけではない〔と展開されます〕。これに対する〔議論の余地なき決定的〕証拠は、神はその民を過去に

において〔罰せられて〕然るべきと思われる際に罰してはこなかったという事実です。この思想は、11節と12節で息を呑むような次なる飛躍を遂げ、時間の次元から空間の次元へと、垂直的に水平的に、ついには神のヘセドのほとんど想像を絶する赦す力にまで移動します。この観点によれば、神が人間を観る時、神が見ているのは彼らの儂さと弱さです、なぜなら、神は親の憐れみ深さを以て彼らを観るからです。ですから、7-10節を、神の赦しによって対処される必要のある人間の不正行為についての認識で以て始まっているものとして、それから15-16節において—あたかも彼らの不正行為の源泉を彼らの人生の儂さの中に位置づけるかのよう—に—それ〔7-10〕へと戻っているものとして〔対応関係を〕見ることは可能です。それ〔父として比喩の持つ親近性〕にもかかわらず、私たちが、神に仕え、—そして、詩編作者のよう—に—彼らの諸々の祝福をささげる天上天下の無数の僕たちの描写を伴った〔詩編の〕終わりに向かうにつれて、力のヒエラルキーは維持されています<sup>25</sup>。

11-14節はその詩編の中心です。詩編145編の作曲家は、神を形式的に構成された宇宙の中心に、理想的な王として位置づけました。代わりに、詩編103編は、神の憐れみ深さの広さを描写するために、天ほどに高く、地平線ほどに遠い空間的広がりのあるイメージを駆使しています。こちらの詩編の作曲家は、神をこの中心的な位置に、理想的な王としてではなく、理想的で憐れみ深い父として位置づけているのです。

## 結 論

そのように〔キアスムスではないですが〕、私たちは始めたように終わることになります。二つの詩編が、出エジプト記の中の神の自己啓示についての章

---

25 訳注：「主をたたえよ」と呼びかけられている僕たちのリストを見ると、「御使いたち」（20 節）には御言葉を聞いて行う力が備わっており、「主の万軍」（21 節）には主に仕え、御旨を行う力が備わっているが、「主の造られたすべてのもの」と「私の魂」（22 節）にはそうした言及がないので、下位の能力をすべて有する上位層と、「主をたたえる」ことしかできない詩編作者の層とで力の階層制を想定し得るということ。

句〔34：6-7〕について、根本的に異なる解釈を提供しています。詩編145編は、王としての神に焦点を当てています。〔王としての神は〕正式な取引のシステム—すなわち、必要としているすべてのものに配慮と世話が与えられ、その見返りに彼らによって感謝と賛美が与えられる〔というシステム〕—の一部として己が臣民たちを支えます。詩編103編の著者にとっては、その代わりに、神は父であり、己が子供たちへの愛情ゆえに、彼らの独立心を尊重しますが、彼らの脆さを分かり過ぎる程よく分かっています。そのような父は、歩んで欲しいと望む道から彼らがどれほど遠く逸れ出そうとも、常に彼らを赦すこととなります。もし、詩編145編の世界が取引的であるとするなら、詩編103編の世界は実存的であると言えます。

神についての二つのかくも矛盾したイメージが同一本文という源泉から導き出され得るということは、その詩編の作曲家たちの霊的な想像力の証拠です。しかし、神についての二つのかくも多様な理解が並んで存在できるということは、『詩編』の編集者たちの知恵の〔決定的〕証拠でもあります。両方が異なる時代と状況下において必要とされる可能性があります。一緒に〔詩編の中にあることで〕それらは、歴史の旅の途上にある活ける共同体の絶え間なく変化する諸々の要求、異議申し立て、そして自己理解に対して、諸々の異なるあり得べき応答を提供するのです。